

よろずは

平成二八年
二月号

万葉歌と季節の植物②

梅の花散らまく惜しみわが園の竹の林に鶯鳴くも

(巻五・八二四/阿倍奥島)

梅の花の散ることを惜しんで、わが庭の竹林には鶯が鳴くことよ。

大伴旅人は、天平二(七三〇)年に大宰府の館で、梅花を愛でる宴を催しました。右の歌は、その宴で詠まれた一首です。当時、梅は中国から輸入されて珍重された植物で、中国六朝詩に詠まれる梅は主として白梅でした。そのため、古代日本の詩歌に詠まれた梅も、白梅を指していると考えられています。中国文学をよく学んでいた大伴旅人は、中国風の風流な宴を、大宰府で実現したのです。

古代中国では、梅と鶯の取り合わせを詠んだ詩が多く作られています。例えば、陳・江総の「梅花落」では、「梅花密処に嬌鶯を蔵す」と詠まれています。このような中国詩を学んだ当時の貴族や官人たちは、日本最古の漢詩集『懐風藻』にも、梅と鶯の詩を残しています。額田王の孫である葛野王は、「春日鶯梅を翫す」の詩に「素梅素靨を開き、嬌鶯嬌声を弄す」庭には白梅が笑窪を開いて、可愛い鶯は美しい声で鳴いている」と詠んでいます。中国詩から日本の漢詩文学を経て、和歌は花鳥の風流を獲得してゆくのです。先日、奈良県でも鶯の初音のたよりがありました。当館の万葉庭園でも、さまざまな梅が咲いています。いよいよ春本番ですね。



【梅・うめ】

しだれ梅 (上)

白梅 (下・右)

紅梅と雪 (下・左)



【万葉古代学係】

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです。

※「万葉歌と季節の植物」では、万葉文化館の万葉庭園にある植物を中心に、季節の万葉歌をご紹介します。